

とういの山甲から

たいぶさみさき

大房岬自然公園ニュースレター No.123

2017年
秋

暑くてじめじめした今年の夏から一転、過ごしやすい秋の季節がやってきました。公園の“音”も、セミからコオロギなどの虫の声に替わっています。じっくり過ごせる秋、何して過ごしましょうか？



Facebook・twitterを更新しています。旬の情報を公開中。
「大房岬自然公園」で検索！

たいぶさ ドングリ巡り コース

マテバシイはどこにでもあり。園内の至るところで拾えます！



◆マテバシイ

きれいな細長い形をした、園内に多いドングリ。あく抜きせず食べられる。

👉コナラとの見分け方
ぼうし(殻斗)をとってお尻をみると、少し引っ込んでいる！



樹皮

縦に細かい白い筋があり、なめらか。灰黒色。

▲スタジイ

ぼうしがバナナの皮のようでかわいいドングリ。千葉では神社のご神木になることも多い木。



樹皮

縦方向に深く割れ目が入る。黒褐色。

●クヌギ

カブトムシが集まる木として知られています。つんつんの髪の毛みたいなぼうしがチャームポイント！



樹皮

分厚く、ゴツゴツした裂け目がある。濃いこげ茶色。

★コナラ

里山のドングリと言えはコナラ！（公園には少ない）うろこ模様のぼうしをかぶっています。芽が出やすいのも特徴。



樹皮

クヌギに比べて皮が薄い。明るめの灰色。

キャンプ場情報

●ビジターセンターでいつでもクラフトできます☆(300円)

秋の旬・どんぐりなど自然素材を使ったネイチャークラフトはいかが？スタッフにお声掛けを。

●秋のキャンプ、夜長のお供に“堅薪”あります。

杉薪(420円)とシイ等の堅薪(750円)がありますが、火持ちのよい堅薪はこれからの冷え込む夜におすすめです。

●メールマガジン停止中につき、公園からの情報を希望された方に本ニュースレターを含むDMをお送りしています。



11月11日(土) 多様性豊かな森を目指して！
どんぐり聖親プロジェクト！

大房の森にマテバシイ以外のドングリの木を増やそうというプロジェクト。この日集めたドングリをご自宅へお持ち帰りいただき、育てて1年後に大房へ戻していただきます。親子でぜひ！

予約・問合せは

☎(0470)33-4551

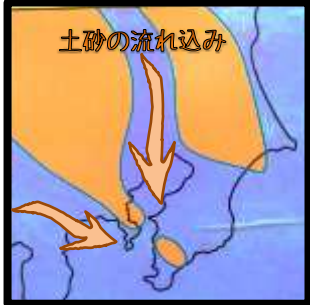
→裏面：連載「大房の謎解きよみもの」

ポイントは「向斜構造」。
硬い岩場が壮大な景観を作った！

大房岬のシンボルといえば南けいせん場から望める美しい「海食崖」。この地層を含む大房の大地はどうやってできたのか？地球の歴史を紐といてみましょう！



①約2千万年前



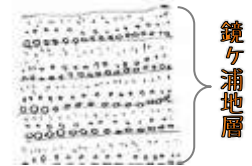
大房の大地ができたのは「約1千万年前」！

時は2千数百万年前。人類が生まれるよりもずっと前に、南関東の海で現在の丹沢・三浦・峰岡地域にのびる地域が隆起し始めました(①)。

隆起すると、その海には陸の方から運ばれてきた土砂が堆積し始めます。これが1千万年ほど前のことで、三浦半島と房総半島が地続きになり、その北と南に海ができました(②)。

この時、この地域に主に堆積したのは火山活動で噴出した火山灰、火山砂、火山礫を主成分とする灰色～黄白色凝灰質砂岩で「鏡ヶ浦地層」と呼ばれ、海食崖含む大房岬の基となる地層になりました。

海底に泥や火山噴出物が堆積(約1千万年前)



鏡ヶ浦地層

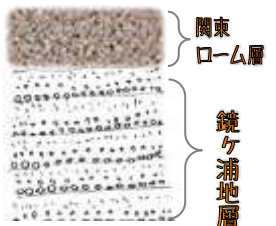
②約1千万年前



現在の“土”のほとんどは富士山から来ていた！

約10万年前から富士山などの火山は噴火を繰り返していますが(③)、その火山灰やスコリア(溶岩)が風で運ばれ、関東平野に降り積もっていきました。それが「関東ローム層」と呼ばれるもので、その中でも最も新しい1～3万年前に富士山・箱根山からの噴出物でできた黒褐色の「立川ローム層」が大房岬の小高い台地部分を覆っています(④)。空気を含み水はけが良く、植物の生育に適した土です。(ちなみにこの層の上部から旧石器時代の黒曜石が見つかっており、この頃には古代人が大房岬に住み着いていたようです)

火山噴出物が降り積もる(1～3万年前)



鏡ヶ浦地層

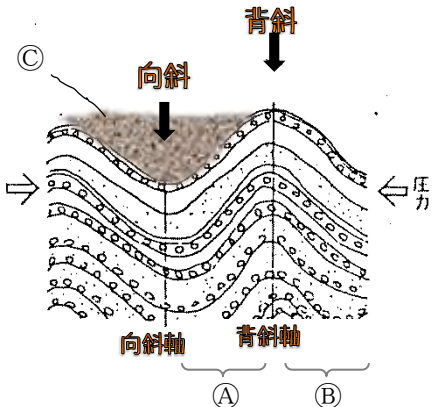
③約10万年前



なぜ海食崖は斜めになっているの？

南けいせん場から見ると、海食崖の縞模様は左(北)から右(南)へ傾いています。その理由は、多田良西浜から岬の先端にかけて「向斜軸」を持つ「向斜構造」が大房岬全体に及んでいることにあります。

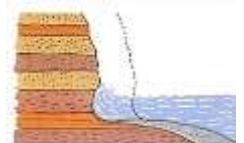
地下のプレートが動くとき、「向斜軸」に向かって両脇から圧力がかかり、地層が曲がります(褶曲)【右図】。向斜軸付近の岩石には強い圧力がかかるので硬く締まり、その上に堆積物が溜まっていきますが、盛り上がった部分(背斜部)は脆く、風や波などで浸食されていきます。



④約2万年前

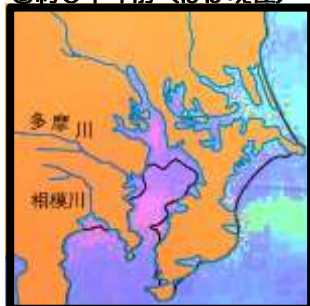


南けいせん場から見えるのはA地層の風景です。Bの部分は200～1万年前の間に氷河時代(氷期)と温かい時代(間氷期)が繰り返される中で、またその後も大房岬が島になったり岬になったりしたために波によって浸食(=海食)されていったものと考えられます。一方、Cの部分は硬い岩盤の上に関東ローム層が乗っかって海拔70～80mの台地状になっていたため、水などの浸食作用を逃れて残されました。



〈海食崖のでき方〉
海岸が波で削られ、徐々に後ろに下がって行く。このとき、硬い岩盤が残る様々な地形/模様ができる

⑤約5千年前(ほぼ現在)



また、岬全体が向斜構造のため、浸み込んだ雨水は中央部に集まり湧き水になって小川を作り、それが滝(不動滝)になって海に流れ落ちるといいう大房岬ならではの環境を作っています。

足元の岩は一体いつ大房に来たのでしょうか…小さな岩に大きな歴史あり。(白井芙季子)

参考文献:「大房岬集団施設地区自然環境等調査報告書」丹青社(1994)、「新・千葉県 地学のガイド」前田四郎監修(1993)、「南房総富浦総合ガイド資料集/大房岬」NPO 富浦エコミューズ研究会 <http://www.mboso-etoko.jp/ecomuse/guide10.html> (2008)、大房岬ビジターセンター展示